

〔統一暦283年 10月2日〕

アルファ・ズリエカは、働き者だ。

ここ五、六年間、ほぼ毎日ここで観測をしている、と言えば、その働き者ぶりを分かってくれるだろうか。

ズリエカIIイシユトルーム式外世界領域観測機
あたしたちが開発し、あたしたちの名がついた観測機
これまでのどの観測機よりも複雑で、ハイテクだ。

外世界領域の発見は、間違いなく統一暦1世紀で最大の発見だったと思う。だが、その研究は進まずじまい。宇宙ですらない外世界は、災厄大戦時代のロストテクノロジーなアイテムが偶然に示しちゃっただけで、現代技術で何とかなる代物では、残念だけじゃなかった。

雪嶋悠
この世界領域ではない、別の世界領域。
パラレルワールド

あまりにも大きな未知は、多くの科学者の興味を駆り立て、へし折っていった。いまのあたしたちなら、20年前の外世界領域観測の試みを見て、そんなにできないわけではないじゃん、と笑い飛ばせるが、それらの挑戦は少しづつ、でも確かに結実の日を近づけて、そして90年前、観測の理論がはじめて整った。初めての機械が遂に別の世界領域の存在を示し、懐疑論者を黙らせるのは、更に20年かかった。

そして長い月日が経って、今。技術学校開校以来の天才アルファは、機械科の問題児だったわたしを引き連れて、新たな理論を組み上げた。それが形を成したものでこそ、あたしたちの傑作、ズリエカIIイシユトルー

ム式外世界領域観測機だった。

ただ観測するだけの従来の観測機とは違い、とうとう理論上は介入さえできるようになったのが、この機械の最も重要なところ。もつとも、これはあたし達二人だけの秘密という事になっている。別の世界領域へ干渉ができるってことは、この世界領域にも干渉を掛けることも当然可能であるってこと、つまり、この機械を持っている者が、世界を自由に書き換えることができちゃうのだ。まあ、実際には介入理論には未知の不備があるらしく、改変は万能ではないけど。そんな恐ろしき理論、その基礎自体は、ほとんどアルファが組み上げたもので、あたしはその理論をなんとか形にさせて、この外世界領域観測機は成立した。

王都から小一時間出たところにあるこの研究所は、軍の技術部の用地の一部を占拠したもので、いちおう技術将校であるあたしたちはここでの研究結果を軍に提供することを条件にお金と資材の自由を得て研究している。もちろん、技術の全部は公開してない。制御しきれない、制御できるかもわからないけれど人殺しには最適な技術が、観測機開発の副産物としてたくさんある。

そういえば、今朝はアルファがずいぶん元気だった。彼女はたいていあたしより遅く寝て、早く起きる。今日は朝起きて共同の研究スペースへ行くと鼻歌なんか歌ってあきらかに上機嫌だった。

「アルファ。今日も早いわね」

「おお、ハル。おはよう」

いつもなら、ん、とだけ言うのだけれど、今日はなんと挨拶を返してくれた。さすがにこれには驚いた。しかも

顔には満面の笑みが浮かんでいた。

「どうしたの？ 何か伝えたくてうずうずしてる顔ね」
アルファはいつも固い口調だし、感情表現が苦手だ。

技術学校時代は孤高をわざと保って感情表現をできるだけ減らしてたらしい。けれど、もう長い付き合いになるあたしは、彼女は実はとつても感情豊かだって気付いている。それを顔にはつきりと表すのが苦手なだけで、細かい顔の動きで、大体のことは分かっってしまう。そういう意味では、感情を隠すのは下手らしい。そして彼女は屈託のない——目にクマはあった——表情を崩さず言った。

「大発見だ。あたしはここ10年で最大の発見をした」

あたしたちは共同研究スペースのはしっこにある机で沸きたてのコーヒーをすすりながら、その成果とやらを語りだした。

「ジル調について、多少は知っているだろう」

「ジル調って確か、世界領域調査法の」

ジル調、ジルベール式外世界領域文化水準調査法。この世界領域を50として、その世界領域の文明がどの程度のものか判定する調査法、というもの……らしい。また、世界領域の大まかな分類法としても機能していて、ざっくり言えばこの世界領域と共通点が多いならA属、違うならB属だ。私はあくまでも観測機のメカニク方面の技術者としての知識しかないので詳しいことは分からないが、世界領域そのものの研究者であるアルファはとても詳しい。

「ジル調というのは、ある程度のガイドがある以外、その数値決定はかなり主観的なものなんだ。A属とB属の分類も、明確な定義があるわけじゃない。特に魔法みた

いな、この世界では空想のものとして扱われている力学体系が実在する世界の文明を、私達の文明とどう比べるのか。そういう面の議論はほとんど進んでいない」

「そこまで言うと、彼女は、だが、と言って同時にちょっとニヤついた。本題はここかららしい。」

「世界領域を2つ用意した。一つは基準世界領域とほとんど変わらないもので、文化水準はジル調でA属の40。もう一つはかなりこのことは異なるもので、ジル調はB属の37と42」

彼女の取り出した二つの書類は、書き換えの対象となつた世界領域の報告書だった。なるほど片方はどうもこの世界と似ているらしいが、もう片方はどうもこのページに『統治構造 魔法の得手不得手による実力社会』と書いてあって、それだけでお察しだった。

「こちらの両方において同じ書き換えを試みた。具体的には季節外れの大雪を降らせることだったが、前者は問題なく成功、後者は失敗した。何故か？」

「それは、世界の違いが大きすぎたからじゃない？」

あまりにも簡単な問いだったから、思わず拍子抜けして聞いてしまったが、素人丸出しの発想とそしられるわけでもなかった。

「そうだ。後者への干渉が失敗したのは、後者がB属であることが理由だと考えるのが当然だ。進歩とかの問題以前にベースとなる文明体系が違いすぎるから介入が失敗したに決まってる、そう思うかもしれないが、じゃあどこに線を引けばいいのか。そこが曖昧だったのだが、要するに改変ができるかどうかをその線引きにすればいいんだよ。」

「ごく当たり前の結論に聞こえるって？ それは改変が

できて当然の技術だと思ってるからだよ。その線引きたる改変ができると知っているのは、この世界に私達しかいないんだから」

「そこまでギリギリ聞き取れたくらいの早口で言うと、結論が近いのだなということがわかる。彼女はマグカップを高く上に向けて一気に飲み干すと、そのままビールジョッキみたいにガンと音を立てて乱雑に置く。あたしのマグとペアのやつだから頼むから割らないでほしいのだけだ。」

「要するに、私はジル調なんかよりよっぽど客観的な世界領域の分類方法を考案したことになる。ズリエカ方式世界領域分類法の誕生だ。介入理論と合わせて私の名は世界領域学史に燦然と輝くことになるな」

彼女はあると言えない胸を鳩もかくやというほど張り、どや顔をする。わずかな口角の傾き、鼻の膨らみ。これは褒めろという表情だ。あたしは一言それはすごいわね、と言って、抱いていた疑問を呈する。

「介入理論も分類法も、介入ができるという事実を公表しないと名前を残せないけど、どうするの？」

「もちろん最終的には発表する。だがこの研究はある程度深いところまで掘っておかなければならない」

あたしの質問に彼女は、問題はそこなんだよねとでも言いたげにほんの少しだけため息をつきながらそのまま行つた。例えばね、と言って続ける。今度は苦々しげだ。

「複数の世界領域が果たしてどのような相互関係を持つのかについては全く分かっていない。私は全ての世界領域が不規則に散らばっているのではないかと思うのだけど、そう思わない学者もいる。かれらは世界領域は同心円を描くように並んで存在し、文明が発達しているほど

円の中心に近いと主張する。現状シル調で50以上我々よりも高い文明水準を持つ世界領域は発見されていないから、彼らはこの世界こそが全世界領域の中心にあり最も優れた文明であると主張するわけだ」

そんなやつらが改変能力を持ったらどうなるか分かるだろ、と続けて、彼女は席を立った。そして、またいつもの観測を始めようと観測機横の机の方に体を向け、背を越しに言う。

「だから、徹底的に詳しく研究し尽くしてから発表する。改変は神の力じゃない。神は存在しない。私たちは神じゃないんだ」

と。それはまるで誰かに言い含めるようだった。

〔統一暦283年 10月5日〕

昼食時間前、机に突っ伏して喚く少女が一人。

「あああなんでああああ」

「煮詰まってるわね」

「煮詰まってるどころじゃない。なんでこれらの世界領域たちは誰がどう見てもA属なのにこんなにも改変抵抗が強いんだ。弱いB属よりずっと強いぞ。というかBOO07がB属にしては抵抗が弱すぎる」

「あー、つまり」

「似ていないのに改変しやすく、似ているのに改変しにくい世界がある。改変のしやすさには似ているかどうかとはまた別のファクターも絡んでいるようだ。それとも一つ。他の種類の改変は全く問題がないのに、ある種の改変だけ改変抵抗が以上に強い世界領域がちらほらあ

る」

顔色からいつもに輪をかけてあんまり寝ていないのがわかる。なんだって、昨日の夕ご飯の時からずっとこの調子なのだ。

「食事できたわよ」

「食べたくなーいー」

「ちゃんと寝てる？」

「寝てなーいー」

「…はあ」

溜息をついたのは、目の前の死んだ眼をした相棒をどうしようかなと思っただけでなく、なんかお母さんみたいたなあたし、とちよつと鬱陶しがられそうな聞き方であることに気付いたからだだった。それでも、ガキンちよを矯正するのは母親の役目なのだから、口を酸っぱくしなければいけない。…いや、母親じゃないんだけど。

「いい？ 生活には食と睡眠っていう大事な柱があって、そこが土台になっていろいろ健康が成り立ってるのよ。だからその二つはおろそかにしちゃいけないわ」

「大事な基礎をおろそかに、駄目にはいけない」

そう復唱する声も、廃人のような体たらくで。

重症ね、とまた溜息をつこうとしたその瞬間に、

ガタン、といきなり立ち上がった彼女の眼には、光が戻っていた。

「そうか、改変抵抗の強い事象を基礎として世界が多様な性を持っている、ということか。つまり改変抵抗の高い事象を共有する世界領域群をひとつのグループとすればいいの。いけるぞ。あとは既知の全ての世界領域でその事象を探せばいい」

もちろんアドバイスのもりで言ったわけではないし、何が『そうか』『いけるぞ』なのかさっぱりわからなかつ

たが、それでも彼女の研究に貢献できたことはいずれ。こういうことは一度きりではなく、一方的でもない。お互いの研究は、お互いのちよつとした一言が爆発的進化をもたらしたりしてくれる。これだからあたしたちは、共同研究者で、同棲者で、マブダチなんだ。

ともかく、世界領域が必ず持つ、改変しがたい特殊な事情。これらは「特異点」と名付けられた。あたしは「運命」と呼んでる。言いと得て妙だと思っただけど、アルファにはウケが悪かった。

〔統一暦283年 10月15日〕

恐ろしいことがあった。

あたしはいつもより少しだけ遅く起きて、各世界領域の情報を精査し、特異点らしきものを調べる作業にあたっていた。

先週にこの図面通りに観測機にアタッチメントを増設してくれと言われて、なかなか無理のある要求だったけど、あたしも一応技術者。二日ちよつとで工事はおおむね終わった。どうも、機構とその後から考えるに、観測機の世界領域報告書の印刷機能の大幅アップデートだったみたいだ。アルファったら、情報工学とかの能力は紛れもなくここ二十年でもトップクラスだけど、機械工学方面は技術学校でも上の中くらいしかないのだから、あたしの助言くらいをうっていいのに。

その後、あたしは頼まれてアルファの研究の手伝いをするようになった。まあ、いつもしてるんだけど、その

割合が普段よりも増えた。仕事というのは複数の世界領域の特異点を特定することらしい。改変をせずに改変抵抗の強さを算出する技術はとうにアルファが作っていたらしいから、あたしはほぼ機械的に仕事ができる。

具体的には、既におおまかな調査をして特異点のあたりをつけてくれてあるのを特定する、というものだ。例えば天候関連に特異点らしきものがあると分かっていたら、絞り込みの末に季節外れの大雪を降らせられないことがわかればよい。ちなみにこの規模はほんとうに多種多様で、晴れに出来ないみたいは大雑把でわかりやすいものから、ある地域には絶対に北北西の風を吹かせられないなんてものもあった。

細かい特異で、一番大事だった、そしてあたしたちの命運を大きく変えたのは、人に関する特異点だった。

人の特異点はどうしても見つけづらいが、それだけに特異そのものが重要であることも多い。

その日あたしが見つけたのは、特定の名前や容姿や性格をした女の子ふたりが、必ず引き合うという特異、運命だった。

『売れっ子作家とファン』として。

『スパイ組織で功績争いの好敵手』として。

『晴れない世界の戦災孤児たち』として。

『王立魔法学校の問題コンビ』として。

『アイドルとマネージャー』として。

『数学少女と文学少女』として。

「ズイ」「アル」という発音を持つ女の子と、「川」「春」というキーワードを名前に持つ女の子が。

片方は理論家で、もう片方はその聞き手。

お互いに信頼のおける、大切な関係で。

気付いたらあたしは、その資料をまとめて、アルファのいるところに駆け出していた。だいたい共同研究スペースのどこかにいるのだけど、机には資料がうす高く積みまれてたりするので、スペースのどこに居るかはすぐには分からない。今回はあたしが共同スペースに居るのだからどこに居るか分かってよかつたはずなのに分からなかったの、珍しいことに自室なのかなと思う。

彼女の自室に行くと、ベッドの上にはアルファが、打ち上げられた後ビチビチするの疲れ何抵抗もなく寝たおさかなみたいなきれいなうっ伏せで倒れていた。寝ているようにも見えたけど、紅茶用の湯沸かしがごぼごぼ言っているし、スピーカーからはサイケデリックなロックが流れている。というか、紅茶とサイケは絶対に相性が悪いと思うのはあたしだけだろうか。音楽の趣味だけはどうも合わない。

一目見れば湯沸かしを待つ間にそのまま寝落ちてしまったようだけど、長年の付き合いはもろろんそうでないことを教えてくれる。キョツケしたまま倒れたかにもえるほどびしょとして倒れているのおさかなは、単に蛍光灯が眩しいのだ。常夜灯にすると暗すぎる微妙な明るさには、あたしも不便を覚えてたびたび愚痴ってるけど、アルファの嫌いっぷりは輪をかけてひどい。

蛍光灯アンチのおさかなは真下に向いていた顔をこちらに向けて、どうした、と喋った。あたしはこれ、と資料を突き出して、さっき見つけてしまったことを語った。

「これ、あたしたちみたいないな二人組の女の子が活躍してる世界領域がたくさんある。この二人組を裂こうとする」と特異点らしい改変抵抗がある」

「成程。私達がここで話しているのは特異…ハルらしい

言い方をすれば、運命だって言いたいのかな」

「…そうよ。あなたは、どう、思うの」

「どうした、顔色が悪いぞハル」

「いいから答えてよ。どうなの、天才」

と言つと、

「…君の結論をなぞるようだが、今のところ、同じグループの世界領域は全ての特異点を共有する。そして、ハルが調べたのは基準世界領域も含まれるグループだ。つまり、ハルの見つけたそれは…」

と返された。

「…だとしたら」

「ん？ だとしたら、何だい？」

「ん、いや、何でもない。何でもないの」

…

…

…

センチメンタルって、一種の沼だと思う。抜け出せないし、抜け出したところで身体は泥だらけで、重くて身動きが取れなくなる。

あたしはアルファに資料を渡して、そのまま駆け込むように自分の部屋のベッドに飛び込んだ。

「…だとしたら」

だとしたら、あたし達がここで一緒にいるのもまた、運命なんだろうか。

偶然とかじゃなくて、必然。

嬉しくはない。

だって、アルファと出会うのが世界の理だとしたら、あたしの感情、アルファという楽しいという感情や、あ

たしたちの履歴、一緒に歩んで成し遂げてきたものとい
うのは、あたしたち自身の意思によるものなんかじゃな
くて、あたしたちは単なる誰かの操り人形、すべてを仕
組まれた存在、つてことではないだろうか。

だとしたら、嫌だな。

〔統一曆283年 10月24日〕

この前みたいにあたしがアルファの部屋に入ってくる
ことは、まあ珍しいわけではないくらい頻度であるの
だが、その逆はほとんどないと言ってよかつた。なんと
つて『私の名は世界領域学史に燦然と輝くことになる』
ほどの発見をした時ですら起こしに來なかつたのだから。
だから朝、ノックすらせず——あたしもしなかつたけ
ど——突然駆け込んできた時にはたいそう驚いた。

「なに、あるふあ……。まだ寝かせて……」

「それどころじゃない。ハル、すぐに来てくれ」

それだけ言つて彼女は出て行つてしまつた。あたしに
とつては目覚まし時計が一つ増えたくらいのもので、そ
の程度で簡単に起きるあたしでは本当はなんだけど、
アルファがここまでするほど大事なことが果たして何な
のか、ちよつと興味がわいて、仕方なく眼を擦りながら
支度を始めた。

共有スペースまで行くと既にあたしの分のコーヒーが
用意されていた。しかもあたしのお気に入りやつ。本
当にどうしたのだろうと思ひながらテーブル席に座ると、

彼女は片手に資料を持っていた。

『天体観測』の特異を見つけたのは、確かハルだつたな

『天体観測』……ああ、うん、あたしだね」

例のあたしたちが遭遇するという運命……いや特異は、
ズイリエカとイシウトウルームの名を取つて「II」特異
というふうには仮の呼び名を付けられて、こゝ最近のあた
したちの研究対象になつていた。あたしたちはいくつか
新しい特異を見つけて、ひとつひとつに報告書を付けて
いった。彼女が持っていた資料は、『天体観測』の特異
学校の屋上で時々天体観測をする二人の女の子について
の報告書だつた。でも、それがどうしたのだろう、とい
う顔を見ると、それを察されて、資料を渡される。

「どうしたもこうしたもない。それを読め」

そこに広がつていたのは、言うなれば変えられた世界。
ここであまり書きたくはないが、この回想資料にくつ
けたその変えられた世界は、まだマシな方かもしれない。
『売れっ子作家とファン』の世界領域は、作家が殺人事
件で死に、ファンは精神に深く傷を負う。彼女は防衛機
構としてその作家のことを一切忘れ、今日も元気に別の
作家にファンレターを送る。「ずっと前からファンでし
た」。

『スパイ組織で功績争いの好敵手』の世界領域では、片
方の大功績に焦つたもう片方が情報を得る代償に敵に情
報を流しすぎて裏切者認定され、ただ肩を並べたかつた
その憧れの相手に肅清された。「さよなら、組織の敵」。

勿論見つかつたすべてが改変されているわけではなかつた。
が、異常というには十分すぎた。答えるまでもな

い質問たちが言葉をついて次々に出ていく。

「これ、どういうこと」

「言うまでもない。改変だ。観測機は改変を観測してい
るから間違いない。だが、誰によるものかがわからない。
これが第一の問題だ」

「あ、あたしじゃないわよ。誰がこんな悪趣味な」

「それが第二の問題。改変そのものは一律で起こせるわ
けじゃないから、この改変がすべて同一人物の手による
ものなら、その改変者は、女の子二人が運命レベルで仲
良くしてるつていうのに、ひとつひとつ介入して死とい
う道具で強制的に二人を引きはがし、報告書に Good End
と書いて回る奴ということになる」

「そんな、何の目的で……」

「目的は問題じゃない。目的の為の手段として人の生命
を刈り取ることを辞さない奴の目的なんて探るだけ無駄
だからね。だから最大の問題は、どうやって、かだ」

「どうやって、つて……そうだ、特異つて確か」

「そう、改変抵抗がとて強い。この観測機では到底不
可能なことをこんなにも簡単に……。私より高度な改変
理論を確立できる観測機理論学者。誰だ、誰がいる。ク
ロス博士、ヴァルシフツ教授、違う、違う……」

そう言つて考察の海に入つていくアルファを呆然と見
つめるあたしの心には、最悪の想像が去来していた。

——この世界をも改変できる、としたら？

不可能、あり得ない。そうであつてほしい。そんな思
いは、誰かに届くはずはないのに、そう願わずにはいら
れなかつた。